

異世界の占星台で見習
いとして転生した元タ
クシー運転手の Ω カン
トが主席占術師 α に「
星が示した番の運命か
らは逃げられない」と
星読みの塔で追い詰め
られ番にされる話

「っ……なん、だ、これ……」

塔の最上階、氷点下の空気が肌を刺す真夜中。星図の写しを取りに戻っただけだった。なのに——膝から力が抜けていく。

抑制香が切れている。

身体の芯が、じわり、と熱を孕み始めた。

「見習い。こんな時間に何をしている」

振り返ったセレンの蒼氷色の瞳が、一瞬だけ見開かれる。ガラス天蓋越しの星明かりが、銀灰色の長髪を青白く染めていた。

「——お前、 β ではないな」

驚きもない。怒りもない。星の位置を読み上げるときと同じ、平坦な声。

「っ……」

(バレた)

ルカは踵を返した。逃げなければ。この身体のことを知られたら——

ガチャン、と背後で錠の落ちる音がした。

「星術で鍵を……っ」

「逃げるな。確認したいことがある」

セレンの声は平坦だった。命令でも威嚇でもない。事実の表明。

「お前のフェロモンが揮発している。Ωか」

「……っ」

答えられない。答えたくない。前世では三十二年間、面倒ごとを避けて生きてきた。深夜のタクシーで怒鳴る酔客にも黙って耐えた。その処世術が——今この瞬間だけ、まるで役に立たない。

身体が熱い。勝手に熱い。脚の付け根が、ずきん、と疼いた。

（やめろ……こんな、非科学的な……前世じゃ考えられない……っ）

足音がする。ゆっくりと、確実に距離を詰めてくる。

「触るぞ」

許可ではなく予告。セレンの長い指がルカの首筋に触れた。——冷たい。

氷を押し当てられたような冷たさに、全身の毛穴がぶわりと逆立つ。

「ひっ……」

声が出た。抑えられなかった。冷たい指が首筋の項腺を辿った瞬間、脚の間がじゅくり♡と音を立てて潤んだ。

（嘘……っ♡ 触られただけで……っ）

「面白い反応だ。項腺に触れただけで、もう匂いが変わった」

セレンの蒼い瞳が、実験記録を取る研究者のそれに変わっている。

ルカの外套のボタンに手がかった。

「な……っ、何して——」

「確認だ。Ωの身体がどう構成されているのか、記録として知っておきたい」

一つ目のボタンが外れる。冷たい指が覗いた鎖骨に触れ、ルカの喉奥から掠れた息が漏れた。

「ここにもフェロモン腺があるな。濃度が項腺より低い」

二つ目。三つ目。外套が肩から滑り落ちる。

次は襯衣の紐。一本ずつ、ゆっくりと。セレンの氷の指が紐の隙間からルカの肌をかすめるたびに、温度差が神経を引き攣らせた。

「っ……う、やめ……っ」

「やめてほしければ具体的な理由を述べろ。『嫌だから』は理由にならない」

反論の余地がない。襯衣が開かれ、冬の外気が素肌に触れる。氷点下の空気に乳首が硬く尖った——のは寒さだけのせいだと、ルカは必死に自分に言い聞かせた。

腰布の留め紐に指がかかった時、ルカの太腿が情けなく震えた。

「震えているな。寒いのか」

「……っ、あたり、まえだろ……氷点下なんだから……」

「では、ここに触れても同じ理由で震えるのか？」

紐が解かれ、腰布が落ちる。下帯だけの姿。セレンの冷たい指が、下帯の上からルカの脚の付け根をすうっ、と撫でた。

「ッ……♡」

声が——甘く裏返った。自分でも信じられない声が出た。

「寒さ、ではないようだな」

「うるさ……っ」

「脱がすぞ」

最後の布が引き下ろされる。

——冬の夜気に晒されたルカの身体。鍛えてはいないが骨格は男のそれ。胸板は薄く、腹は引き締まり。しかし、脚の合わせ目には——

(見るな……っ♡)

心の中で叫んでも、声にならない。

セレンが膝をつく。ルカの秘部を、至近距離から、一切の遠慮なく覗き込んだ。

「——なるほど。Ωのカントか」

淡々と。初めて見る星図を記録するように。

「男の身体に、これがあるのか。項腺といい、お前の身体は資料的価値が——」

「資料って言うな……っ♡♡」

恥ずかしさで涙がにじむ。前世三十二年、男として生きてきた記憶がある。それなのに今の身体には、男にあるべきものがなく、代わりに――

（こんなもん、俺のじゃない……っ♡ 前世じゃハンドル握ってただけの手で、こんな場所触られて……っ）

「クリトリスがある。形状は女性のそれと同じだが、フェロモン腺からの距離が近い。項腺を刺激すると連動して充血するのか――確認する」

「確認って……っ♡ え、あ、ちょ――っ」

セレンの冷たい指先が、ルカのクリトリスに触れた。

「ひょッ♡♡」

背骨を電流が駆け抜けた。氷の指先が、熱く充血した突起に触れた瞬間――快楽が全身を薙いだ。

「反応が顕著だ。触れただけでここまで充血するとは」

「やめ……っ♡ そこ、だめ……っ♡♡」

（俺は男だ……っ♡ 前世だって男だった……っ♡なのに、なんでこんなところが、気持ちい――）

認めたくない。認めたくないのに、身体が裏切る。セレンの冷たい指がクリトリスの突起をくるり♡と撫でるたびに、ルカの腰が勝手にびくん♡びくん♡と跳ねた。

「声の抑制を試みているようだが、下半身の反応は隠しきれないぞ」

「っ……♡♡ 黙っ……てろ……♡」

「割れ目から分泌液が出ている。氷点下の環境で、触れただけでこの量——興味深い」

セレンの指がすうっ、と下へ滑る。クリトリスから、その下の裂け目を辿って。

「っはぁ……♡♡ ンン……っ♡♡」

冷たい指が割れ目をなぞる。薄く開いた肉の隙間に、セレンの指先がゆっくりと沈んでいく。

——ぬちゅ♡

「ぁ……っ♡♡ 中、冷た……っ♡♡ 指……冷たいの入って……」

「粘膜の温度は外気より遥かに高い。俺の指との温度差が——ああ、締まったな。壁が指を囓んでいる」

「やだ……っ♡♡ そんなこと言うな……っ♡♡」

（嫌だ嫌だ嫌だ……♡ 冷たい指が中に入ってるだけなのに……♡ 気持ちいい……♡♡ こんなの、おかしい……っ♡）

セレンの長い指が、ルカの中をゆっくりと探る。冷たい指先が熱い粘膜を撫でるたびに、温度差が快楽に変わって脳を灼いた。

「奥の壁に突き当たった。子宮口だ。触れると——」

とん♡と指先が奥を突いた。

「ひやおッ♡♡♡」

ルカの背中が弓なりに反った。全身の筋肉が引き攣り、カントの中がセレンの指をぎゅう♡と絞り上げる。

「……強い反応だな。子宮口に触れると全身が痙攣する。記録しておく」

「き、記録とか……っ♡♡ やめ、ろ……っ♡♡ あッ♡ あッ♡ 指、動かすな……っ♡♡」

セレンの指が中で屈曲し、子宮口の周囲をこりこり♡と撫で回す。冷たい指先が最も敏感な場所を的確に刺激し続けた。

（だめ……っ♡♡ なんか、くる……っ♡♡ 前世じゃ絶対こんな……男がこんなとこで……っ♡♡）

「分泌液の量が増した。子宮口刺激と分泌量は比例関係にあるのか。もう少し深く——」

ずちゅ♡と指がもう一本加わる。二本の冷たい指が、ルカの中を押し広げた。

「おおお……っ♡♡♡ ふた、つ……っ♡♡ 二本入ってる……っ♡♡」

「拡張性が高い。もう一本入るな」

「む、りっ♡♡ むり……ッ♡♡ あッ♡ おひ……ッ♡♡ ジンジン……ッ♡♡♡」

三本目が押し込まれた瞬間、ルカの膝が完全に砕けた。セレンの腕に支えられなければ、その場に崩れ落ちていた。

「立てないのか」

「あ……ッ♡♡ あ、たりま、え……っ♡♡ こんなこと、
されて……立てる、わけ……っ♡♡」

「そうか。では——」

セレンがルカの身体を抱え上げ、星図が広げられた机の上に押し倒した。硬い木の感触が背中に冷たい。星図の羊皮紙がルカの汗で湿っていく。

「星図が……汚れる……っ」

「構わない。書き直せばいい」

ルカの脚を大きく開かせ、セレンが再び膝をつく。露わにされたカントが、星明かりの下で濡れ光っていた。

「分泌液の味を確認する」

「は……？♡♡ な……っ♡♡」

セレンの唇がカントに押し当てられた。

「びいッ♡♡♡」

——冷たい。セレンの唇まで冷たい。その冷たい唇がルカの最も熱い場所に触れた瞬間、全身が痙攣した。

ちゅる♡ちゅる♡と、セレンの舌がカントの裂け目を丁寧に舐め上げていく。

「おッ♡ おッ♡ おッ♡ やだ、し、舌……っ♡♡ 舌入
れるな……ッ♡♡」

（やめてくれ……っ♡♡ 舐められて……カントが……っ♡
男なのに……ッ♡♡ 前世三十二年の記憶全部持ったまま、
男に舐められて……っ♡♡ 気持ちいい……♡♡♡）

セレンの冷たい舌が肉の襷を割って中に入り込んだ。熱い
粘膜と冷たい舌先の温度差で、ルカの意識が明滅する。

「おおッ♡♡ だめ……っ♡♡ 中、舌で、こねる
な……っ♡♡」

ちゅるるるっ♡♡♡

セレンが思い切りカントを吸い上げた。

「ッ♡♡♡ あびッ♡♡♡♡」

ルカの腰が机から浮いた。星図の上で身を振り、涙を散ら
す。

セレンの舌がクリトリスに移る。冷たい舌先で硬く勃った
突起をちろり♡と弾き、そのままくるくる♡くるくる♡と回
し舐めた。

「ぐんぐんッ♡♡ そこっ、そこだめ、一番——っ♡♡♡
おッ♡ おッ♡ セレン……ッ♡♡ 離してっ♡♡」

「離さない。まだ確認が終わっていない」

確認。確認。全部確認。セレンにとっては全部、ただの確
認。

そのことが——なぜか、胸の奥にちくりと刺さった。

理由は分からない。分かりたくもない。

「おおあッ♡♡♡ だめっ♡♡ なんか、くるっ♡♡ やだ、こんなとこで……っ♡♡♡」

（いく……っ♡♡ カントでいく……っ♡♡ 初めてなのに……っ♡♡ 男なのに、カントで……ッ♡♡♡）

セレンの舌がクリトリスを吸い上げると同時に、中に残っていた指が子宮口をこっつ♡と突いた。

「——ッ♡♡♡♡」

声にならない絶叫。ルカの身体が跳ね上がり、カントからびしゃ♡と透明な液体が噴いた。星図の上に。羊皮紙の上に。

「……潮吹きか。子宮口刺激とクリトリスへの同時刺激で発生する反射だな。量が多い」

ルカは返事ができなかった。意識が半分飛んでいる。

初めてのアクメ。カントで。男の身体で。この銀髪の占術師の、氷の指と舌で。

「はっ……♡♡ はっ……♡♡ はぁ……♡♡♡」

「もう行っていい。鍵は解除した」

セレンの声は最初と何も変わらなかった。もう星図に目を戻している。何事もなかったかのように。

ルカは震える手で服を拾い、乱れた呼吸を整えることもできないまま、逃げるように塔を降りた。

* * *

——三日後。

(あれは事故だ。もう行かない)

そう決めたはずだった。

なのに夜番の星図写して塔に上がると、セレンがいた。ガラス天蓋の下、星図に定規を当てている。

「……写しの資料を取りに来ただけだ」

「そうか」

それだけ。セレンは振り向きもしない。

ルカは書架から羊皮紙の束を取り、帰ろうとした。だが深夜も過ぎた頃——身体の奥に、あの疼きが蘇った。抑制香の効果が切れかけている。

「また切れかけているな」

セレンが星図から目を上げずに言った。

「前回の続きを確認させろ」

「……続きって何だよ」

「子宮口への圧力と分泌量の相関データが不十分だった。もう数パターン試したい」

(こいつ本気で言ってるのか……?)

前世なら一笑に付していた。だが——

「嫌なら断ればいい。俺は強制しない」

その声は本当に平坦で、本当に強制する気がなくて。

ルカは断らなかった。

前世から染みついた処世術。面倒ごとは受け流す。波風を立てない。——それに。

（三日間ずっと……あの、冷たい指の感触が……身体の奥に残ってて……っ♡）

それだけだ。断るほうが面倒だったただけだ。

「……好きにしろ」

「では外套を脱げ」

二度目は前回より丁寧だった。

セレンの冷たい指がルカの服を一枚ずつ剥ぎ、露出した肌に触れるたびに、その部分の温度と反応を呟くように記録していく。

「鎖骨周辺のフェロモン濃度、前回より高い。三日間の蓄積か」

「いちいち実況するな……っ♡」

「事実を述べているだけだ」

カントに指が触れた瞬間、ルカの腰が跳ねた。前回と同じ——いや、前回以上に。

「もう濡れている。前は触り始めてからだったが、今回は触る前からだ」

「うるさいっ……♡♡ だから実況を……っ♡♡」

「ここ。前回反応が大きかった場所——」

セレンの冷たい指が、裂け目の奥に沈んでいく。ぬるり♡
と熱い中が指を咥え込んだ。

「おっ♡♡ んん……っ♡♡♡」

「覚えている。ここに触れると声が出る」

——覚えている。

その一言に胸が跳ねた理由を、ルカは考えないようにした。

氷の指が中を探る。前回より深く。前回より丁寧に。奥の壁を一周するようになぞり、粘膜の温度と質感を確かめるように。

「子宮口。今回はここで最も強い反応が出た。今回は——」

とん♡

「ひゃっ♡♡♡」

「——同様な。いや、締まりが前回より強い」

「やっ……♡♡ 奥、だめ……奥突くなっ……♡♡」

（三日間……っ♡♡ この指の感触をずっと……覚えてた……っ♡♡ 身体が覚えてて……っ♡♡ こいつの指でないと……っ♡♡）

二度目のアクメは、前回より深く、長かった。

行為のあと。セレンが暖炉の前で毛皮をルカにかけた。ルカが身体を丸めて余韻に震えていると、セレンの手がルカの肩に一瞬だけ触れた。

——温かい。

いつも氷のように冷たいセレンの指先が、ほんのりと温かった。ルカの体温が移ったのだ。

「……お前に触れると、指が温まる」

独り言のように。ルカには聞こえていないと思って。

でもルカは聞いていた。

* * *

三度目。四度目。五度目。

いつも塔の最上階。いつも深夜。抑制香が切れかけた頃にセレンの前に行く——もはや理由をつけることすらなくなっていた。

ルカの身体はセレンの指を覚え尽くしていた。冷たい指がカントの入口に触れた瞬間に反射的に潤む。自分で触っても駄目だった。セレンの「冷たさ」でなければ達せなくなっていた。

セレンも変わりつつあった。行為のあと、ルカを帰さない時間が長くなっている。「星図の整理を手伝え」と理由をつけて隣に座らせる。不自然に近い距離で。

ある夜。雪がガラス天蓋を覆い、星が見えなかった。

「今夜は観測ができない。暇だ」

セレンが手持ち無沙汰にしている。

「ルカ。こっちに來い」

——名前で呼ばれたのは初めてだった。いつもは「お前」か「見習い」。

毛皮の敷かれた寝台の上で、セレンが横になっている。外套を脱いだだけの姿。

「寒い。温めろ」

ルカが隣に横たわると、セレンの冷たい腕がルカの腰に回った。いつもの行為の始まり——かと思ったが、違った。

セレンはただルカを抱き寄せ、その体温に身を預けている。冷たい鼻先がルカの首筋に埋まった。

「……温かい」

囁き。初めて聞くセレンの声の——柔らかさ。

ルカの胸が、ぎしり、と軋んだ。

「今夜は……確認しないのか」

「星が見えない夜は、観測も実験もしない。ただ——温まりたいだけだ」

薄く笑った。初めて見るセレンの笑顔だった。

この夜は行為なし。ただ抱き合って眠った。

前世で誰にも求められなかった自分が、ただ体温を求められている。それだけで——

(……楽だ)

翌朝。セレンが起きる前に、毛皮を彼の肩までかけ直して塔を降りた。